武蔵野

国木田独歩著

雪　華　社

武蔵野

（他三篇）

昭和四十四年十月三十日初版発行
定価　四二〇円

著者　国木田独歩
発行者　栗林英逸郎
印刷所　文京紙業印刷

発行所　株式会社　雪華社
東京都千代田区神田錦町二の九
郵便番号一〇一
電話　東京（二九四）七五九七
振替　東京　四二一一五〇

落丁，乱丁がありましたら，おとりかえします

目次

武蔵野……3
牛肉と馬鈴薯……33
運命論者……65
酒中日記……101
解説　福田清人……155

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

武蔵野

武蔵野

一

「武蔵野の俤は今纔に入間郡に残れり」と自分は文政年間に出来た地図で見た事がある。そしてその地図に入間郡「小手指原久米川は古戦場なり太平記元弘三年五月十一日源平小手指原にて戦う事一日か内に三十余度日暮れは平家三里退いて久米川に陣を取る明れば源氏久米川の陣へ押寄すると載せたるはこの辺なるべし」と書込んであるのを読んだ事がある。自分は武蔵野の跡の纔に残っている処とは定めてこの古戦場あたりではあるまいかと思って、一度行って見るつもりでいて未だ行かないが実際は今も矢張りその通りであろうかと危ぶんでいる。ともかく、画や歌でばかり想像している武蔵野をその俤ばかりでも見たいものとは自分ばかりの願いではあるまい。それほどの武蔵野が今は果していかがであるか、自分は詳しくこの問に答えて自分を満足させたいとの望みを起こしたことは実に一年前の事であって、今は益々この望みが大きくなって来た。

さてこの望みが果して自分の力で達せらるるであろうか。自分は出来ないとは言わぬ。容易でないと

信じている。それだけ自分は今の武蔵野に趣味を感じている。多分同感の人も少なからぬことと思う。

それで今、少しく端緒をここに開いて、秋から冬へかけての自分の見て感じた処を書いて自分の望みの一少部分を果したい。先ず自分がかの問に下すべき答は武蔵野の美今も昔に劣らずとの一語である。昔の武蔵野は実地見てどんな美であったことやら、それは想像にも及ばんほどであったに相違あるまいが、自分が今見る武蔵野の美しさはかかる誇張的の断案を下さしむるほどに自分を動かしているのである。自分は武蔵野の美と言った、美といわんより寧ろ詩趣といいたい、その方が適切と思われる。

二

そこで自分は材料不足の処から自分の日記を種にして見たい。自分は二十九年の秋の初めから春の初めまで、渋谷村の小さな茅屋に住んでいた。自分がかの望みを起こしたのもその時の事、また秋から冬の事のみを今書くというのもそのわけである。

九月七日――「昨日も今日も南風強く吹き雲を送りつ雲を払いつ、雨降りみ降らずみ、日光雲間をもるるとき林影一時に煌く、――」

これが今の武蔵野の秋の初めである。林はまだ夏の緑のそのままであり乍ら空模様が夏と全く変ってきて雨雲の南風につれて武蔵野の空低く頻りに雨を送るその晴れ間には日の光水気を帯びて彼方の

林に落ち此方の杜にかがやく。自分はしばしば思った、こんな日に武蔵野を大観することが出来たら如何に美しい事だろうかと。二日置いて九日の日記にも「風強く秋声野にみつ、浮雲変幻たり」とある。恰度この頃はこんな天気が続いて、大空と野との景色が間断なく変化して日の光は夏らしく雲の色風の音は秋らしく極めて趣味深く自分は感じた。

先ずこれを今の武蔵野の秋の発端として、自分は冬の終るころまでの日記を左に並べて、変化の大略と光景の要素とを示して置かんと思う。

九月十九日――「朝、空曇り風死す、冷霧寒露、虫声しげし、天地の心なお目さめぬが如し。」

同二十一日――「秋天拭うが如し、木葉火の如くかがやく。」

十月十九日――「月明かに林影黒し。」

同二十五日――「朝は霧深く、午後は晴る、夜に入りて雲の絶間の月さゆ。朝まだき霧の晴れぬ間に家を出で野を歩み林を訪う。」

同二十六日――「午後林を訪う。林の奥に座して四顧し、傾聴し、睇視し、黙想す。」

十一月四日――「天高く気澄む、夕暮に独り風吹く野に立てば、天外の富士近く、国境をめぐる連山地平線上に黒し。星光一点、暮色漸く到り、林影漸く遠し。」

同十八日「月を踏んで散歩す、青煙地を這い月光林に砕く。」

同十九日――「天晴れ、風清く、露冷やかなり。満目黄葉の中緑樹を雑ゆ。小鳥梢に囀ず。一路人影なし。独り歩み黙思口吟し、足にまかせて近郊をめぐる。」

同二十二日――「夜更けぬ、戸外は林をわたる風声ものすごし。滴声頻りなれども雨は已に止みたりとおぼし。」

同二十三日――「昨夜の風雨にて木葉殆ど揺落せり。稲田も殆ど刈り取らる。冬枯の淋しき様となりぬ。」

同二十四日――「木葉未だ全く落ちず。遠山を望めば、心も消え入らんばかり懐し。」

同二十六日――夜十時記す「外屋は風雨の声ものすごし。滴声相応ず。今日は終日霧たちこめて野や林や永久の夢に入りたらんごとく。午後犬を伴うて散歩す。林に入り黙座す。犬眠る。水流林より出でて林に入る、落葉を浮べて流る。おりおり時雨しめやかに林を過ぎて落葉の上をわたりゆく音静かなり。」

同二十七日――「昨夜の風雨は今朝なごりなく晴れ、日うららかに昇りぬ。屋根の丘に立ちて望めば富士山真白に連山の上に聳ゆ。風清く気澄めり。

げに初冬の朝なるかな。

田面　水あふれ、林影　倒に映れり。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

十二月二日――「今朝霜、雪の如く朝日にきらめきて美事なり。暫くして薄雲かかり日光寒し。」
同二十二日――「雪初めて降る。」
三十年一月十三日――「夜更けぬ。風死し林黙す。雪頻りに降る。灯をかかげて戸外をうかがう、降雪火影にきらめきて舞う。ああ武蔵野沈黙す。しかも耳を澄ませば遠き彼方の林をわたる風の音す、果して風声か。」
同十四日――「今朝大雪、葡萄棚堕ちぬ。夜更けぬ。梢をわたる風の音遠く聞ゆ、ああこれ武蔵野の林より林をわたる冬の夜寒の凩(こがらし)なるかな。雪どけの滴声軒をめぐる。」
同二十日――「美しき朝。空は片雲なく、地は霜柱白銀の如くきらめく。小鳥梢に囀ず。梢頭針の如し。」
二月八日――「梅咲きぬ。月漸く美なり。」
三月十三日――「夜十二時、月傾き風急に、雲わき、林鳴る。」
同二十一日――「夜十一時。屋外の風声をきく、忽ち遠く忽ち近し。春や襲いし、冬や遁(のが)れし。」

三

昔の武蔵野は萱原のはてなき光景をもって絶類の美を鳴らしていたように言い伝えてあるが、今の武蔵野は林である。林は実に今の武蔵野の特色といっても宜しい。即ち木はおもに楢の類で冬は悉く落葉し、春は滴るばかりの新緑萠え出ずるその変化が秩父嶺以東十数里の野一斉に行われて、春夏秋冬を通じ霞に雨に月に風に霧に時雨に雪に、緑蔭に紅葉に、様々の光景を呈するその妙は一寸西国地方また東北の者には解し兼ねるのである。元来日本人はこれまで楢の類の落葉林の美を余り知らなかった様である。林といえばおもに松林のみが日本の文学美術の上に認められていて、歌にも楢林の奥で時雨を聞くという様なことは見当らない。自分も西国に人となって少年の時、学生として初めて東京に上ってから十年になるが、かかる落葉林の美を解するに至ったのは近来の事で、それも左の文章が大いに自分を教えたのである。

「秋九月中旬というころ、一日自分がさる樺の林の中に座していたことがあった。今朝から小雨が降りそそぎ、その晴れ間にはおりおり生暖かな日かげも射してまことに気まぐれな空合い。あわあわしい白雲が空一面に棚引くかと思うと、フトまたあちこち瞬く間雲切れがして、無理に押し分けたような雲間から澄みて怜悧し気に見える人の眼の如くに朗かに晴れた蒼空がのぞかれた。自分

は座して、四顧して、そして耳を傾けていた。木の葉が頭上で幽かに戦いだが、その音を聞いたばかりでも季節は知られた。それは春先する、面白そうな、笑うようなさざめきでもなく、夏のゆるやかなそよぎでもなく、永たらしい話し声でもなく、また末の秋のおどおどした、うそさぶそうなお饒舌りでもなかったが、只漸く聞取れるか聞取れぬ程のしめやかな私語の声であった。そよ吹く風は忍ぶように木末を伝った。照ると曇るとで雨にじめつく林の中のようすが間断なく移り変った、或いはそこに在りとある物総て一時に微笑したように、隈なくあかみわたって、さのみ繁くもない樺のほそぼそとした幹は思いがけずも白絹めく、やさしい光沢を帯び、地上に散り布いた、細かな落ち葉は俄に日に映じてまばゆきまでに金色を放ち、頭をかきむしったような「パアポロトニク」（蕨の類）のみごとな茎、しかも熟え過ぎた葡萄めく色を帯びたのが、際限もなくもつれつからみつして目前に透かして見られた。

或いはまた四辺一面俄に薄暗くなりだして、瞬く間に物のあいろも見えなくなり、樺の木立ちも、降り積ったままでまた日の眼に逢わぬ雪のように、白くおぼろに霞む——と小雨が忍びやかに、怪し気に、私語するようにバラバラと降って通った。樺の木の葉は著しく光沢が褪めても流石になお青かった、が只そちこちに立つ稚木のみは総て赤くも黄ろくも色づいて、おりおり日の光が今雨に濡れた許りの細枝の繁みを漏れて滑りながらに脱けて来るのをあびては、キラキラときらめいた。」

即ちこれはツルゲーネフの書きたるものを二葉亭が訳して「あひびき」と題した短篇の冒頭にある一節であって、自分がかかる落葉林の趣きを解するに至ったのはこの微妙な叙景の筆の力が多い。これは露西亜の景でしかも林は樺の木で、武蔵野の林は楢の木、植物帯からいうと甚だ異っているが落葉林の野は同じ事である。自分はしばしば思うた、もし武蔵野の林が楢の類でなく、松か何かであったら極めて平凡な変化に乏しい色彩一様なものとなってさまで珍重するに足らないだろうと。

楢の類だから黄葉する。黄葉するから落葉する。時雨が私語く。凩が叫ぶ。一陣の風小高い丘を襲えば、幾千万の木の葉高く大空に舞うて、小鳥の群かの如く遠く飛び去る。木の葉落ち尽せば、数十里の方域に亘る林が一時に裸体になって、蒼ずんだ冬の空が高くこの上に垂れ、武蔵野一面が一種の沈静に入る。空気が一段澄みわたる。遠い物音が鮮かに聞える。自分は十月二十六日の記に、林の奥に座して四顧し、傾聴し、睇視し、黙想すと書いた。「あひびき」にも、自分は座して、四顧して、そして耳を傾けたとある。この耳を傾けて聞くということがどんなに秋の末から冬へかけての、今の武蔵野の心に適っているだろう。秋ならば林のうちより起る音、冬ならば林の彼方遠く響く音。

鳥の羽音、囀る声。風のそよぐ、鳴る、うそぶく、叫ぶ声。叢の蔭、林の奥にすだく虫の音。空車荷車の林を廻り、坂を下り、野路を横ぎる響。蹄で落葉を蹴散らす音、これは騎兵演習の斥候か、さなくば夫婦連れで遠乗りに出かけた外国人である。何事をか声高に話しながらゆく村の者のだみ声、そ

れも何時しか、遠ざかりゆく。独り淋しそうに道をいそぐ女の足音。遠く響く砲声。隣りの林でだしぬけに起る銃音。自分が一度犬をつれ、近所の林を訪い、切株に腰をかけて書を読んでいると、突然林の奥で物の落ちたような音がした。足もとに臥ていた犬が耳を立ててきっとその方を見詰めた。それぎりであった。多分栗が落ちたのであろう、武蔵野には栗樹も随分多いから。もしそれ時雨の音に至ってはこれほど幽寂のものはない。山家の時雨はわが国でも和歌の題にまでなっているが、広い、広い、野末から野末へと林を越え、杜を越え、田を横ぎり、また林を越えて、しのびやかに通り過ぐ時雨の音の如何にも幽かで、また鷹揚な趣きがあって、優しく懐しいのは、実に武蔵野の時雨の特色であろう。自分がかつて北海道の深林で時雨に逢ったことがある、これはまた人跡絶無の大森林であるからその趣は更に深いが、その代り、武蔵野の時雨の更に人なつかしく、私語くが如き趣はない。

秋の中ごろから冬の初め、試みに中野あたり、或いは渋谷、世田ケ谷、または小金井の奥の林を訪うて、暫く座って散歩の疲れを休めてみよ。これ等の物音、忽ち起り、忽ち止み、次第に近づき、次第に遠ざかり、頭上の木の葉風なきに落ちて微かな音をし、それも止んだ時、自然の静粛を感じ、永遠の呼吸身に迫るを覚ゆるであろう。武蔵野の冬の夜更けて星斗闌干たる時、星をも吹き落しそうな野分がすさまじく林をわたる音を、自分はしばしば日記に書いた。風の音は人の思いを遠くに誘う。自分はこの物凄い風の音の忽ち近く忽ち遠きを聞いては、遠い昔からの武蔵野の生活を思いつづけたこと

もある。

熊谷直好の和歌に、

よもすがら木葉かたよる音きけは
しのひに風のかよふなりけり

というがあれど、自分は山家の生活を知っていながら、この歌の心をげにもと感じたのは、実に武蔵野の冬の村居の時であった。

林に座っていて日の光のもっとも美しさを感ずるのは、春の末より夏の初めであるが、それは今ここには書くべきでない。その次は黄葉の季節である。半ば黄ろく半ば緑な林の中に歩いていると、澄みわたった大空が梢々の隙間からのぞかれて日の光は風に動く葉末々々に砕け、その美しさ言いつくされず。日光とか碓氷とか、天下の名所はともかく、武蔵野の様な広い平原の林が隈なく染まって、日の西に傾くと共に一面の火花を放つというも特異の美観ではあるまいか。もし高きに登って一目にこの大観を占めることが出来るならこの上もないこと、よしそれが出来難いにせよ、平原の景の単調なるだけに、人をしてその一部を見て全部の広い、殆ど限りない光景を想像さするものである。その想像に動かされつつ夕照(ゆうひ)に向って黄葉の中を歩けるだけ歩くことがどんなに面白かろう。林が尽きると野に出る。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c